

『忘れられた日本人』の智慧を信じる」

岸田隆夫(副代表理事)

「遊行者」の系譜－行基から宮本常一へ－

名前をどなたもご存じの「行基(668-749)」は、奈良東大寺の大仏さまを造営した立役者です。晩年には、我が国の最初の「大僧正」に任命されています。しかし、行基は壮年期、寺のある『山』を下りて、『平地』を遊行して民衆へ布教活動する傍ら、橋・道・池・用水路などの土木工事を中心とした社会事業を進めて、「菩薩」と崇められる程、多くの民衆の尊敬を集めました。晩年には、東大寺の「勸進僧」として、造営工事を手配すると共に、全国を募金活動に歩き廻りました。

遊行した僧(聖)としては、「市聖(いちのひじり)」と言われた「空也(903-972)」や、「遊行上人(ゆぎょうしょうにん)」、「捨聖(すてひじり)」と言われた「一遍(1239-1289)」が、民衆から強く支持を得ました。僧俗の範疇を超えて遊行した存在としては、「遁世聖」と言われた「西行(1118-1190)」や「俳聖」と言われた「松尾芭蕉(1644-1694)」が挙げられます。更に、遊行者として、全国に木彫りの仏像を残した「円空(1632-1695)」、江戸後期の旅行家、博物学者である「菅江真澄(1754-1829)」も忘れられない存在です。

「遊行」と「巡礼」

上記では、余り使われない「遊行」の言葉を用いましたが、「巡礼」はしばしば耳にします。霊場巡礼では、四国遍路八十八ヶ所巡り(約 1,200~1,400km)や西国三十三所巡り(約 1,000km)が有名です。海外でも、フランスを起点にスペインの北部を巡る「サンティアゴ・デ・コンポステーラ(約 800km)」があります。巡礼のシンボルであるホタテ貝を首に提げ、または、水筒代わりにひょうたんを持って歩きます。巡礼証明書(コンポステラーノ)を得るためには、徒歩 100km 以上、自転車なら 200km 以上との条件があります。自分の脚で歩くことが重視されていることが分かります。いずれの巡礼も、概略のスケジュールの下で宗教上の聖地を順路に従って巡ります。参加者にとって観光的な要素も多分に含まれています。

一方、「遊行」は、私度僧や聖と呼ばれた民間宗教流布の担い手で、仏教の儀礼や教義を普及する半僧半俗の宗教者が大半を占めて、ルート計画を殆ど立てずに各地を巡り歩くものです。知識人として農作物・食文化の普及や寺の建設など地域文化の発展に貢献しました。

『忘れられた日本人』の著者 宮本常一

そして、『忘れられた日本人』の著者で、明治・大正・昭和と生き抜いた民俗学者、農村指導者、社会教育家の「宮本常一(1907-1981)」を、遊行者の系譜の最後に位置づけたいと思います。民間伝承を採取する仕事で全国を歩き回り、年 200 日のフィールド調査を続け、生涯では 16 万 km 地球 4 周分を殆ど徒歩で踏破し、3 千以上の村を訪れ、1 千軒を超える民家に泊まり、古老と話し込み、記録しました。

著書には、古老の話として、①周防(すおう)大島出身の漁民梶田富五郎翁による対馬浅藻(あざも)での築港譚、②同じく周防大島出身の大工増田伊太郎翁による萩・山口での奇兵隊の経験談、③河内・滝畑の左近熊太翁による鳥羽伏見の戦や西南戦争での経験談、④島根県邑智(おうち)郡の農政家田中梅治翁の稲作指導談など、自ら直接聞き取った結果が記述されています。これらの古老に共通するのは、若い頃には奔放な旅や生活体験を持ち、独自の視座から文化に広く精通して、良い意味の好奇心を持ち続けていることです。村人からは、世間師(しよけんし・せけんし)として尊重される存在でした。

宮本常一自身が、立派な世間師として、離島や部落問題等に取り組みました。その成果として、佐渡・小木の太鼓(おんでこ)座、山口・光の周防猿まわし、佐渡・海府の裂(さき)織りの伝承(相川郷土博物館)などを挙げるすることができます。

双方の経験・智恵を大切に作る習慣

同著書には、こうした『世間師』の体験談に加えて、対馬の2つの集落伊奈と千尋藻(ちろも)での「寄りあい」について記述されています。そこでは、集落の総代たちが結論を急がず、長い時間を掛けて自由に発言して、それを良く聴いて合意形成を図ります。学術的には留保点があるようですが、こうした土着の「寄合民主主義」に流れる「時間を掛けて自由に発言し合い、結論を導く風習」は、私たちも大事にしたいものです。

敬意を持って相手の意見を聴く姿勢は、いつの世でも大切ですが、その意見の裏にある貴重な経験とそれによって育まれた智恵に目を向けたいものです。そのためには、いくつになっても衰えぬ好奇心を持ち続け、自らの脚で歩き回り、「世間師」を見つけて直接話を聴き、貴重な情報を自分の五感で受け止めることが重要だと思います。宮本常一によって1967年に日本観光文化研究所から創刊された雑誌名「あるくみるきく」に端的に示されています。

私たちの地域国土強靱化研究所(LRRI)の活動に当たっても、ともすると「忘れられてしまいかねない方々(老若男女・日本人を問いません)」の経験と智恵を信じて、できる限り正確な情報を集めて、丁寧に時間を掛けて意見を出し合い、その意見に良く耳を傾けて、より理に適った選択肢を見つけて、前に進んで行きたいものです。

以上、2020.8.4 記

記) 現在、宮本常一(1907-1981)は、民俗学者として柳田国男・折口信夫・南方熊楠と並び称されるまでになっていますが、生前はそれ程、注目される存在ではありませんでした。その「再評価」の機運を作ったのは、ノンフィクション作家佐野眞一による『旅する巨人—宮本常一と渋沢敬三』(文藝春秋、1996)とされています。宮本常一が貧しさの中でも直向きに歩き続け古老達の話の聴き廻った歴史共に、渋沢栄一の孫で日銀総裁・大蔵大臣まで務めた子爵渋沢敬三が民俗学とそれに携わる人々へ愛情を注ぎ続けた爽やかな生き様を伝えています。佐野は、著書「宮本常一のみなざし」(みずのわ出版、2003)の中で、『忘れられた日本人』について感慨をもって記述しています。(佐野眞一「宮本常一が見た日本」2001)



梶田富五郎翁

少し長い引用になりますが、その一部を紹介します。

「とりわけ土佐山中の盲目の元馬喰が語る「土佐源氏」の色ざんげの哀切さと、対馬に渡った孤児(みなしご)漁民が回想する「梶田富五郎翁」の開拓話のたくましさには、私は打ちのめされるような感動を覚えた。

ああ、目の見えぬ三〇年は長うもあり、みじこうもあった。かまうた女のことを思い出してのう。どの女もみなやさしいええおんなじゃった。(「土佐源氏」)

やっぱり世の中で一ばんえらいのが人間のごいす。(「梶田富五郎翁」)

長じて私はノンフィクションを書くようになるが、いつも念頭にあったのは、『忘れられた日本人』だった。あんな作品をいつか書いてみたい。宮本常一は、遙か先を行く私の先達だった。」

その佐野眞一は上記の言葉どおり、「新忘れられた日本人」シリーズとして毎日新聞社から4冊の単行本(2009-2012)を出版して、人知れず日本を支えた人々を描き出しています。



大工・木村長吉翁と宮本常一
(佐野眞一著「失われた昭和」2004)

2022.8.17 追記